



No.38
NABUNKEN NEWS

Sep.2010



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目8-1
<http://www.nabunken.jp/>

■ 特別展「天平びとの声を聞く」開催

このたび、平城宮跡資料館で、平城宮跡発掘調査50周年記念「天平びとの声を聞く－地下の正倉院・平城宮木簡のすべて－」を開催します。

平城宮跡では、50年の長きに涉り継続的・計画的な学術調査がおこなわれてきました。全体の約1／3が調査され、多くの成果を上げてきました。そのなかでも、木簡の発見は非常に重要です。無言だった遺跡が、言葉を持って語り出したのです。

今回、発掘調査50周年を記念して、その言葉を多くの方に、大いに聞いていただこうではないか、ということでこの特別展を企画しました。会期は9月25日から11月7日まで（展示替えをおこなう10月12・26日は特別展は休み。通常展示はご覧いただけます。）、各会期ごとの出品点数はそれぞれ約100点、延べ約300点の木簡を展示します。木簡の展示としては、空前の規模の展覧会です。

教科書で見たあの木簡の実物を見ることができる。これまで「話には聞いていた」木簡に出会える。天平びとの、生の息吹に触れることができる。

平城宮の木簡は、平城宮や平城京を語るだけではありません。各地から人も、物資も、情報も平城宮に集められていました。平城宮の木簡の声を聞くことは、奈良時代の全国各地の様子を耳にすることにもなります。また、木簡だけでは語り尽くせない部分は、土器や瓦といった面々にも登場してもらいます。

それだけではありません。どうやって読みにくい木簡を読むのか、といった内容も含めて、出土から調査研究にいたる一連の流れを感じていただき、時には来館者の皆様に参加していただける展示構成になっています。展示を最後までご覧いただければ、もはや木簡研究者の仲間入りをしていただけることでしょう。

そして、資料館を一歩出れば、そこは木簡が埋まっていた、そしてまだたくさんの木簡が埋まっている平城宮跡です。そこは木簡に言葉を託した、天平びとたちも暮らし働いた場所です。この展覧会をご覧になった皆さんは、平城宮跡の風のそよぎの中に、かすかに天平びとの声を、女官の衣ずれの音を、聞くことができるはずです。

木簡は、非常に弱いので、普段は実物を展示できません。ぜひ、この機会に生の天平びとの声を聞きに、また彼等の眺めた景色をご覧に、お越しいただければと思います。

なお、10月9日には、展示に関する特別講演会を予定しています。さらに、10月3・17・31日には、研究員によるギャラリートークも予定されています。実際に、木簡の調査・研究にあたっている研究員ならではの視点からの解説や、こぼれ話が満載です。こちらも、ぜひお運び下さい。

（都城発掘調査部 馬場 基）



天平びとの一例

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第163次）

今回の調査地は、藤原宮朝堂院朝庭です。朝堂院は、大極殿を取り囲む大極殿院の南に接し、回廊に囲まれた東西235m、南北320mの長方形の空間で、その中央にひろがる朝庭広場と、朝庭を取り囲むように建ち並ぶ12棟の朝堂からなります。朝堂院とは、貴族官人が日常的に集合して天皇への奉仕をおこなう場とされ、そこでは朝堂の政務や、国家的儀式および饗宴も執りおこなわれたと考えられています。

この調査では、朝庭の調査は、2008年の第153次調査が最初です。朝庭の最北端（大極殿院南門の南側）を発掘し、朝庭に広がる礫敷や複数の排水溝を検出して、朝庭の整備状況の一端を解明しました。また、儀式用の旗竿を立てたと考えられる柱穴も発見しています。

第153次調査に引き続き、今回も朝庭広場の調査をおこないました。その目的は、①朝庭の整備状況、②朝庭儀式に関する遺構、③藤原宮の造営過程に関する遺構、の3つを調べることです。ここで紹介する調査成果は6月末までのもので、②と③の調査は7月以降も引き続き調査の課題となります。調査面積は東西50m×南北30mの1500m²、調査期間は2010年4月から開始し、現在も継続中です。

これまでの主な成果は、調査区の全面に直径3~10cm程の礫が敷かれていることがわかり、第153次調査区と同じような朝庭の整備状況が、さらに南側にも広がると判明したことです。第153次調査で検出した排水溝や石を詰めた暗渠も、やはり南へ延びることを確認しました。

いまのところ、朝庭儀式に関係する遺構にはまだ確定的といえるものはありません。今回の調査で期待されるもののひとつに、国家的儀式のための仮設構築物（例えば天皇の即位儀礼に際して設けられる大嘗宮など）に関する遺構の検出が挙げられます。平城宮の東西の朝堂院では、すでに様々な建物や6時期分の大嘗宮遺構などが検出されていますが、藤原宮では第153次調査で検出した旗竿の支柱のはかに、そうした遺構はまだ確認されていません。今回の調査は朝庭中央部を調査していることから、何らかの建物や区画施設などの存在が確定すれば、朝庭儀式の解明に重要な手がかりを得ることにつながります。

6月末の時点でも、礫敷面でのわずかな痕跡や、新しい時代の耕作による溝の断面で得られた痕跡という限られた情報から、いくつかの遺構の存在を推定していますが、その有無を確定する作業は、7月以降の調査でおこなっています。今後の調査成果にご期待ください。（都城発掘調査部 森先一貴）



飛鳥藤原第163次調査区全景（南から）

平城宮東院地区西北部の調査（平城第469次）

平城宮の東院地区には、皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれ、奈良時代を通して儀式や饗宴に利用されていたことが知られています。

東院地区では、これまで南半部を中心として発掘調査を進めており、復元整備された東院庭園をはじめとして、多くの掘立柱建物群が見つかっています。

今回の調査地点は東院地区の中でも北西に位置します。この南方に位置する昨年度調査区（平城第446次）では、東院中枢部へつながると考えられる東西通路が確認され、これをはさんで南北に建物群が広がっていることがわかりました。特に通路の南側では大規模な総柱建物群が検出しており、今回の調査では、通路北側における建物群の構造を知ることを目的としています。調査面積は850m²で、調査は2010年4月1日に開始し、現在も継続中です。

今回の調査で見つかったのは、掘立柱建物8棟、掘立柱塀12条、溝5条です。これらは周辺の調査の成果に基づくと6期以上に区分できます。このうち注目されるのは、調査区中央部の東西塀とその両隣を走る幅約1mの2条の溝です。東西塀は、奈良時代を通して何度も建て替えられながら機能していたようです。また、2条の溝のうち北側のものは、石組をもっており、改修されつつ利用されていたと考え

えられます。この2条の溝からは、土器や瓦などの多量の遺物が出土しました。この調査区中央部の塀と溝を境界として、南北に各時期にわたって建物群が配置されています。ただし、この中央の区画（塀と溝）を境として、その南北では建物群の規模が異なっています。南側では、柱間の距離や柱穴の大きさから大規模な建物と推定されるものが多く、北側には小規模なものが多いのです。この中央の区画を境界とする南北の違いは、遺物の出土状況や内容にも表れていて、北側は南側よりも出土量が多い傾向があり、食器類や大甕が目立ちます。このことから、区画北側でこれらを保管あるいは使用していた可能性が考えられます。

こうした状況は、今回の調査区より南方にある大規模な総柱建物群が並ぶ空間では認められません。したがって、これらの空間とは性格が異なり、今回の調査区付近が東院地区での人々の生活を支えたバックヤードとしての機能を備えた空間であったと考えられます。

今後も東院地区的調査は継続されますが、今回これまでと性格が異なる空間が見えてきたことで、東院の様子がより明らかになることが期待されます。

（都城発掘調査部 芝 康次郎・桑田 調也）



平城第469次調査区全景写真（東から）



宇治の文化的景観

宇治の中心部である中宇治地区は、宇治川が山地から京都盆地に流れ出す谷口にあたり、比較的浅く伏流水が流れる扇状地に立地しています。排水性と保水性を兼ね備えた砂礫質土壤で、昼夜の寒暖差があり、露が発生しやすいという宇治の自然条件に招かれるよう、平安時代には貴族により園池を伴った別荘が営まれました。また、そうした地形や地質は茶の栽培に適していたことから、室町時代以降、宇治は茶の生産・製造・流通拠点として一大ブランドを形成していきます。

中世になると別荘地時代の格子状街区を貫く宇治橋

通りが新設され、そこに茶師の屋敷群が建ち並びました。現在も宇治橋通りには茶師屋敷が残るほか、茶商や茶農家の町家も点在しています。こうした町屋の敷地は近代に茶師屋敷を短冊状に割ったものであるため奥行きが30間にも及び、正面に表屋、奥行方向に深く延びる土間に沿って製茶関連施設を配することを可能にしました。特に、大正期に開発された煉瓦造りの碾茶用乾燥炉は長さが8間にも及ぶ長大なものです。

中宇治地区は、重層的に形成された都市構造、そこで育まれてきた茶業を中心とする生業とが有機的な関連性で結ばながら、現在も人々の営みが続けられて

宇治白川の茶園

茶摘み期の白川の茶園は、ほぼ全面が草葺などで覆われる中に柿の古木が一人静かに立つ、一片の絵画を思わせます。てん茶や玉露を栽培する茶園は、よく知られる茶畠とは異なり、茶摘み期に上面を覆って遮光する覆下園（おいしたえん）という形式を持ちます。無関係に立つかに見える柿の木も、茶の生育を見守る上に欠かすことができないもので、白川の茶園景観を個性的に彩っています。



宇治橋通りに面する茶農家の町家

上写真：茶畠から運ばれてきた茶の芽は敷地正面から搬入されます。深い庇で確保された軒下空間に芽が降ろされ、一輪車で大開口の引き違い戸を通り抜けるのです。敷地奥に展開する土地利用と生業との関係は、町家の表構えにも滲みだしています。

下写真：一輪車に乗せられた芽はフラットに整えられた土間を通り奥の茶工場に運ばれます。茶工場では焼瓦造りの長大きな焙炉が現役で動き、そこで最高級のてん茶（抹茶）が製造されています。

いる場所です。こうした価値が評価され、2009年2月、宇治の中心部である中宇治地区とその周囲の茶畠が、「宇治の文化的景観」として国的重要文化的景観に選定されました。奈良文化財研究所では、現在、宇治の文化的景観に関わる整備活用に向けた調査と計画策定を宇治市と共同で進めています。

独自の地質・地形という強固な経系に、古代の別荘地や中世以来の茶業が縫糸となり紡がれてきたのが宇治だとすると、私たちはその紡ぎが持続していく方法を考えていきたいと思います。

（文化遺産部 惠谷 浩子）

鷹島海底遺跡における埋蔵環境調査

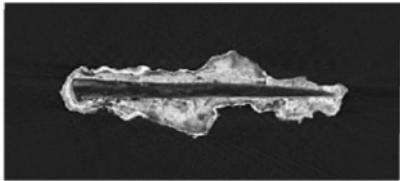
保存修復科学研究室では、鉄製造物に関して、埋蔵環境が遺物の劣化へおよぼす影響の解明を研究課題の1つに掲げ、鉄製造物が出土する様々な遺跡の環境調査と、それら遺物の劣化状態に関する調査をおこなっています。ここでは海底遺跡から出土する鉄製造物と、その埋蔵環境に関する調査を紹介します。

蒙古襲来の舞台として知られる鷹島は、長崎県と佐賀県に跨る伊万里湾に位置します。1281年の“弘安の役”の際に、日本遠征のために鷹島沖に集結した大艦隊が、暴風雨によって一夜にして壊滅した元寇終焉の地として有名です。島の南岸沖合の海底には、1994年に発掘された木製のいかりを始めとして、東端から西端にわたり元寇にまつわる多数の遺物が含まれています。

平城宮跡から出土する鉄製造物では、その表面は鉄さびで覆われ、内部まで金属の腐食が進行しているものの、内部は“詰まった”状態にあるのが一般的です。ところが鷹島海底遺跡出土の鉄製造物の内部構造について、X線CTによる調査を実施した結果、遺物内部は半ば空洞化しており、著しく鉄が溶出したことが認められました。そこで、これらの鉄製造物が異なる劣化状態に至った要因を求めて、季節ごとに鷹島海底遺跡において環境調査を実施するとともに、海水と海底の堆積物を採取して持ち帰り、実験室において小さな海底を再現して、鉄製造物の腐食を再現する実験を実施しております。

これらの調査は、一見すると埋蔵文化財の保存処理とは直接には結びつかないようにも思われるかもしれません。しかし新たな根治療法の確立をめざして、鉄製造物が抱える様々な“病気の原因”を究明すべく、研究に取り組んでおります。

(埋蔵文化財センター 脇谷 草一郎)



鉄釘のX線CT画像。黒く見える部分は空洞化した部分。鉄釘が溶出して空洞化した様子が認められる。

平城宮跡資料館 夏期企画展 「平城宮跡 今・昔 -岡田庄三写真展-」

平城宮跡資料館では「平城宮跡 今・昔」と題して7月10日～8月31日に岡田庄三氏の写真展を開催し、3万8千余名の方にご来場いただきました。

岡田氏が約半世紀にわたり撮影してきた平城宮跡の風景を中心に、約50点の写真パネルが会場に並びました。昭和30・40年代の写真は、宮跡が一部しか国有地化されていない史跡整備前の様子を伝える貴重な資料です。

平城宮跡の昔と現在の写真を見くらべながら、「エーッ！50年前はここが一面田んぼだったの！」と驚く若い人、佐紀町のお祭りの写真に知人の若き日の姿を見つけ思い出話に花を咲かす地元の方、昭和30年代のカメラを指さし、「昔、こんな家のものもあったなあ～」と懐かしむ人達など、会場をのぞいていると、皆さんいろいろな声が聞こえてきました。

今回は、地元の方にも是非ご覧いただきたいと考え、自治会のご協力を得て宮跡周辺の町内に広報することができました。また宮跡内に校舎がある都跡小学校の児童の皆さんにも、会場の一角に設けた掲示板コーナーに参加していただきました。

岡田氏は連日にわたり足をお運び下さり、入館者の方々に、撮影者ご本人だからこそできる解説・エピソードを話して下さいました。

この展示を通じて、はるか1300年前の平城宮だけでなく、ちょっと昔の平城宮跡の姿を振り返り、現在までのうつりかわりを感じていただいたことが、宮跡を守り今後に伝えていくことにつながっていくのではないかと感じております。

(企画調整部 渡邊 淳子)



昔の写真に見入る人々

韓日発掘調査交流に参加して

韓国・国立慶州文化財研究所と日本・奈良文化財研究所が2006年度に取り交わした「韓日共同発掘調査交流協約」に基づいて、私が日本へ派遣される旨を聞いた時、果たして私にできることはなんだろうか、という不安や心配が頭に渦巻いていました。

というのも、これまでの私は、日本語は無論のこと、日本の歴史や考古学についてもあまり知識を持つていなかったためです。訪日前の短期間に日本語を習得することは難しかったため、日本の歴史や文化に関する本を読んでおくことが、日本滞在中に少しでも助けになるのではないか、と考えていたことが思い起こされます。

日本には2010年2月8日～3月20日まで滞在し、その間、甘樫丘東麓遺跡と平城宮東方官衛の2ヶ所で発掘調査に従事しました。甘樫丘東麓遺跡が当時の天皇よりも強力な権力を握っていた蘇我氏の邸宅に関する遺跡である点や、平城宮東方官衛が掘立柱建物と礎石建物を対照的に配置している点などについて、新羅月城周辺の調査を担当している私には、互いに類似しているという印象を受けました。

調査の間は、英語や韓国語を用いて研究員の方たちと対話を重ね、遺跡の解釈についても話し合うことができました。特に、傾斜面に位置する甘樫丘東麓遺跡の地形について、誤差を少なくするためにデジタル3D測量と人間の手による実測を合わせておこなう調査方法を学んだことや、平城宮東方官衛において、礎石建物の重複関係を研究員と検討できたことは、良い経験となりました。また、発掘調査中におこなう作業として、韓国とは異なる点も参考になりました。特に、遺構確認の状況を略測したカード（遺構カード）を作成し、その変化を日々修正していく姿はとても印象的でした。

発掘調査以外でも、例えば研究所の展示室や整理作業室を見学することも、私にとってはまるで宝物船の中を散策しているような感覚でした。韓国の遺物と似ているけれども、違いのある土器や瓦類、慶州では出土例がそれほど多くない良質の木材・木製品、収蔵庫いっぱいに保管されている木簡、金属製品などを見学することができました。特に、土器と瓦の編年体系が確立しており、発掘現場において遺物が発見されれば、比較的簡単にその年代を知るこ

とができる基準資料室は、私たちの研究所においてもすぐに準備しなければいけない、と改めて思いました。また、奈文研では資料整理が着実におこなわれ、考古学的な発掘調査の成果や研究資料に関するデータベースが整っており、研究所の調査研究の歴史を振り返ることは、それほど難しいことではないのだろうな、と考えました。

また、一つのシステムを長い熟考の後に構築し、その後は大きな変更を加えずに維持していく奈文研の姿勢と、とりあえずシステムを導入し、その後に隨時修正していく私たちの姿勢とでは、大きな違いがあると実感しました。例えば、発掘現場で、私が訪問した時期には未だにデジタルカメラを使用していないかったことには驚きました。しかし、デジタル化した際の資料の検索や閲覧、その他の様々な問題に備えて、検討を重ねている姿を見て、私たちも見習わなければならぬ部分があると感じました。

日本についてこれまで無関心であった私が、日本において生活できたのは、田辺所長をはじめとする多くの方々のご配慮のおかげです。発掘現場に参加し、周辺の様々な遺跡を見学することで、日本の古代文化を形づくったのはどのような人々なのか、どのような政治的な変動を経たのかなど、日本の歴史についての理解を広げることができ、本当にありがとうございます。静けさのただよう飛鳥・藤原を自転車で周りながら、古の風景に思いを巡らせることができたことは、楽しい追憶としてこれからも残っていくと思います。

最後に、お忙しさなかにもいやな顔一つせず、私を助けてくださった奈文研の皆様に改めて感謝し、両研究所の交流がさらに発展していくことを祈念いたします。

（大韓民国・国立慶州文化財研究所 姫 太姫）
日本語訳：都城発掘調査部 高田 貴太



平城宮東方官衛の現場にて（左が筆者）

飛鳥資料館 秋期特別展 「木簡黎明—飛鳥に集ういにしえの文字—」

飛鳥資料館では2010年10月16日（土）～11月28日（日）までの1ヶ月間秋期特別展「木簡黎明—飛鳥に集ういにしえの文字—」をおこないます。この特別展は、平城宮跡資料館でおこなわれる木簡展「天平びとの声をきく」と呼応して開催されるものです。

平城宮跡資料館の「天平びとの声をきく」展では、平城京を中心とした8世紀の木簡が展示されますが、本特別展では、全国各地から発掘された7世紀の木簡を集め公開いたします。そして、今回公開される約170点の実物の木簡には、これまであまり公開されてこなかった奈文研が保管する飛鳥・藤原地域より出土した木簡をはじめ、全国各地の有名な7世紀木簡が一堂に会する稀有な機会といえるでしょう。

今回の特別展では多くの貴重な木簡を展示しますが、各木簡の展示は遺物保護の観点から、約2週間に限っておこないます。そのため展示期間は3つに分かれており、Ⅰ期（10月16日～11月1日）、Ⅱ期（11月2日～11月15日）、Ⅲ期（11月16日～28日）を予定しております。各期で展示される木簡は全く異なるものですので、それぞれの期間で違う表情の展示室をご覧いただけると思います。

また、木簡に馴染みが薄い方でもお楽しみいた

だけるように、初級者向けのパネル解説やカタログなども準備しております。そして、木簡のほかにも、奈良県石上神宮七支刀や埼玉県稻荷山古墳鉄劍の各々のレプリカなど、最初期の文字史料も展示しております。木簡のみならず広義の文字史料を捉える展覧会となっておりますので、出土史料に興味がある多くの方々にお楽しみいただけれる内容となるかと思います。そして、10月17日（日）には寺崎保広 奈良大学教授による記念講演会、10月23日（土）、11月6日（土）、20日（土）には学芸員または研究員によるギャラリートークもおこないます。是非、7世紀の黎明の木簡の姿をお楽しみください。

（飛鳥資料館 成田 壽）



飛鳥・藤原地域より出土した紀年木簡（レプリカ）

■ お知らせ

公開講演会（第107回）

2010年11月13日（土）

於：平城宮跡資料館講堂

平城宮跡資料館 秋期特別展

2010年9月25日（土）～11月7日（日）

平城宮跡発掘調査50周年記念

「天平びとの声をきく

－地下の正倉院・平城宮木簡のすべて－」

2010年10月9日（土）特別講演会

飛鳥資料館 秋期特別展

2010年10月16日（土）～11月28日（日）

「木簡黎明—飛鳥に集ういにしえの文字—」

2010年10月17日（日）

記念講演 寺崎保広 奈良大学教授

■ 記録

埋蔵文化財担当者専門研修

○建築遺構調査課程

2010年6月14日～18日

16名

○古代・中近世瓦調査課程

2010年9月1日～7日

18名

現地説明会

○飛鳥藤原第163次発掘調査（藤原宮朝堂院）

2010年7月3日

423名

○平城第469次発掘調査（平城宮東院地区西北部）

2010年7月17日

950名

特別講演会（東京会場）

2010年9月25日 於：有楽町朝日ホール

「くれないはうつろうものぞ」

深澤 芳樹 発掘調査部長

「銅鏡－花器として生きる－」

難波 洋三 企画調整部長

「古代人の肉食の忌避という虚構」

松井 章 埋蔵文化財センター長

「日本庭園のはじまり」

小野 健吉 文化遺産部長

「古代遷都の真実－飛鳥宮・藤原京・平城京の謎を解き明かす－」

井上 和人 副所長

「特別講演 古代史研究と奈良文化財研究所」

佐藤 信 東京大学教授

入場者数526名

飛鳥資料館 夏期特別展

○展示 「小さな石器の大きな物語」

2010年7月16日～9月5日 入場者数5,435名

■ 最近の本・所員の著作から

○森先 一貴『旧石器社会の構造的変化と地域適応』

（株）六一書房 2010年5月

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2010年9月